



アーヴィル島沖航空戦 四
アーヴィル島沖航空戦 四

眉筆

アーヴィル島沖航空戦 四
アーヴィル島沖航空戦 四

ブーゲンビル沖

可不波向

微塵に碎け波に去りぬ

二の時二の日と忍び入り

熱切高の海、蒸鷺

千載不朽偉業は香川

ラバウル海軍航空部隊

轟うちこり脚下に迷不敵艦隊を

必殺雷轟

轟うち止まし

全艦殆んど破り去りぬ

二の時二の日と忍び入り

熱切高の海、蒸鷺

千載不朽鬼神之強

うぶら海軍航空部隊

雄々かり

譽は御博く海の蒸鷺

太平洋の運命擔

固三讀

二の時二の日と忍び入り

熱切高の海、蒸鷺

千載不朽空の鎮

えんれん海軍航空部隊

万才そ

ブーゲンビル勝鬪

五十餘隻々不逞の仇

沖の夕陽と高々人

二の時二の日と忍び入り

熱切高の海、蒸鷺

千載不朽偉業は香川ラバウル海軍航空部隊

十一月十八日 第三次ブーゲンビル沖航空戦、敗戦

成敗記

十一月二十一日(晴天)

二の日遂に海兵突破。決心を定む。
只ニの上は一意誠心、断じて頑張り抜く決心也。

力足らずば玉碎あるのみ
行くぞ、断じて行くぞ、

人生僅々三十一年也。

嗚呼！

誓つて江田島湾頭に凱歌を舉げん。

我二の日遂に海兵突破の決心を定む。

思ふニヒ世間がすして止まぬニそ

大和男子の心なりけル

(明治天皇御製)

一粒の麥地に落とし死なずば生きず

點滴刃牙也

断じて行へば鬼神も之を避く

日本刀

鍛冶研磨幾百回。
不疑日本刀鋭利。
霜降三尺玉無埃、
曾試盤根錯節來。

*Success
who
Saints
comes
not!
to
him*

十一月二十四日(水) 晴

今日は朝より陰鬱の嫌な天氣。三日連続で過るが、
授業も大いにまかせなし。五時限・八代、宿題は試験。午後は出で
何う三十日から四十日まで、イタリア勤務奉仕^{奉仕}。十日間の間隔を除くと、
二十六日未明に現れ、義理の登場。余程うつり方へと歌詞がそ
夜は、又精神立ち直り、午前中は、つづけて上へで駐てた。

午後は、心地悪くなるので、船の上へで、大いに感念なり。

律令をよみながら、やはり後回りで、断こしては出来のう。

この時頃から、心地悪くなる。今日の大晦日、歌う。

九時、甲子年一大人卓也。大人會、卓徒出陣の心にて
居間入浴。左半身、濡れ玉成。射的の成。大の半身前途、腰車
新武道長久。半身ノ大の感子^{感子}ありて、徹夜と深酒。
寢室、半身一燈。幾度か睡魔に襲はれて、遂に寝起り通じ
る。精神力、何物か寝て難い。

please come & say who pointed out?

何う、大晦日、本日、明日、本日、動搖の出来事有り不得。

頗る長此、本日、動搖の出来事有り不得。感謝。不吉。美行! 初の御歎! 倒立傳!

十一月二十九日(月)

午後、一ト島方面漁戦中、二二三、又大戰果昂。

日、我方潜水艦敵空母一枚。撃爆確定。又、大破。

又、第一潜水艦一ト島沖敵空母、空母一隻撃沈。

午後、二日、第三潜水艦一ト島沖敵空母三隻撃滅。此洋艦、是擊沈

巡洋艦(名、ソ戦艦)、重上破滅。

噶、偉大なる成帝日海軍一級空母隊、潜水艦隊。

本日、西洋東、代數、試験あり。百千、一二、兩器之上。

① 我輩、初、試才にて、總括的準備、切合參考か?

日本、九時記式準備の型を破り、因む切合せりか?

全「大暗記」を以て

断呼排年干之也。

満点の自信無くも勿れ。大暗記式こそその最善。方法ある。要は、
草向即戰隼了の世の中一夜讀主義軍断じて許され得。

事此處に至り我輩は、草木等より總括的草肉、二小二大、學肉、瘦皮子
もつゝ最上。言葉である。無圖失譯。暗記す。無退去。草原法
を根本から覆へる。然るも今日、試行十九回通し成功した。其の後
また中止せし。二回目。辦理にもやう思ひ。

代勧の方は、あまり準備しなかつたが、全部古本を答。多く大体一回通し
而残る。問題、幾何、土曜日、断じて頑張らばならぬ。
午後口語論理、打續、試験、何蓋、質問する所か。

今日 古本、名上級學校入試、
二回目。約束通り、獨創今後もうけたり。西子、本懶考一統に上
べし。然る余は、初心者徹て理解し得る。

十一月三十日(火) 恨晴

朝から余り気分良くなりし。況々人下さん。時向さんへお見舞
に至り。今日一日全く省なし。余程こなせんと駄目を以て。一年
今の君達。力なし。何處も入小学校もろい。しかし、いつも吉田やうだ。
・勉強は、三ヶ月オフリヤ小学校取れる。然る、日本
才三時限。幸運の種望航空機。根子理論、解説。長講義。

④時報書道は、清書「春水滿四海」。草書多奇筆。

主時間 ガンコト。六時限全般教練。終之イ。一番校内を下り

出立。後は、オーライ。達成ハヤクキモトカヒト呼ぶ。誰かと思ふ。

四十九日。御代也歸る。もう早「方へ」と馳けて来る事。

二人で明日、勤務奉仕へ少し遅れて行事事中。今不傳任被謹請!

氣。合は二人か。歸宅四時。

夜は、口一回、試験準備。十四日、ウイクター行動を取る。

三日間、別小室。良口。籍、二三箇を以て。其の後、高橋生!

十二月一日 (水) 晴

草徒出陣の日 世界最强 神州草徒出陣時
師小手米鬼莫麿！高門迈步理性的培養、
戰陣の發揮不徧徧草徒一正二世界無比也！
征日（草徒）日本国民、絶大なる期待を體會せり
皇、征日、我之續々、至々續々！断じて續々也！

今日火、用心始、子供隣組有志と一戸繰り用心！火の用心！
又二月迄やうやく

十二月二日 (木) 晴 晴 風甚強、霜降り

白霜降り寒風肌刺す。然らず南寒の復活。

三月、四月、孤軍奮闘、帝主の恩を馳す。

何の心なし、斷じて頑張り、一途努力、磐根錯節世、存るに

戰果、醉心、非口民の方、一矢了却、況人外、莫、

言はずかぬ、只ひがほひ、精進、致日點日、萬事の叶也。

本日午五、六時限、前陸軍駕道班員、少佐、夏井算。

内山某氏来候、少佐、御附、少佐、少佐、化、大陸、南方方面活躍中の日本人、

少佐、言派方の日本人、少佐、誠、微口たまつてあり。

大日本帝國臣民として、自覺不足、故、南方住民、（注：今二年）

日本人、一聲半一段足らず、注視之、勿忘、おもひを、徧々、指導者

として、日本人、使命、第一、御潤す、苟無事、此處にて、

日本、日本人、二段目、自當、指導民族として自當、

理下の狀況、口、史、國歎、深、如、其事、此處にて、

帝都、（注：二、三、）補活、地、日本文化の中心地、今、主導力教育上

莫、日本居るが、新鮮、熱烈、當然、臺灣、難怪、以て、

日本人、之、自當、口玉、之、戴、之、南、方、信、方、之、應、之、也、

日本人を激励してやつて戴きまへ誰が南方を渡さん君達は關係が無
く云ひ得テ、君達こそ日本の方在るが、日本の方と力と為す君達が
多金の日本人として自覺を持てゐるか? 驚向を感する中には思
ううる人を居やう、私が居道の半から眞に自覺の有る人が三十人
以上十人やうに出で戴きまへ

噫！日本人よ。自當よ。知らん人ぞ！（
今も偉人有る。大使命を天より授つて 大和民族
理想・果て深遠哉。だが、その偉人有る使命を
同胞は知らざりし乎）歎！歎！歎！

十二月五日(日) 晴天 温暖

象庭草園一私拜。行之。辭以力聖。不以。致謝。了。
今日晴。退園。至午。王徒。至是。不。是。人。驚。不。知。
入園。三。居。方。得。全。然。良。象。今。禮。處。不。以。之。事。之。落。着。不。然。
驚。不。何。外。之。為。品。不。良。客。貌。今。日。晴。水。之。服。裝。之。飾。之。外。血。食。玉。片。手。
一。博。口。上。石。游。是。古。美。一。半。之。五。之。驚。之。也。誰。以。何。之。六。之。古。
彼。大。口。主。非。一。人。前。以。为。之。私。一。草。園。之。偉。人。之。力。之。判。之。
入。園。居。之。大。部。都。以。良。象。之。限。之。一。分。之。知。小。之。少。不。連。之。內。侍。女。之。少。
首。一。人。以。以。不。事。不。一。忘。活。不。之。一。人。之。非。不。二。之。之。二。象。聖。草。園。
童。人。空。之。使。命。以。与。之。一。博。生。之。天。不。一。博。生。之。兩。親。是。弟。姊。妹。之。喜。之。半。之。
便。帝。之。爲。之。想。之。五。圓。廢。焰。之。職。員。半。小。之。涅。之。和。喜。之。方。之。之。神。樣。不。
更。王。之。之。聚。食。子。供。之。華。一。神。其。口。半。之。傳。大。力。之。華。而。力。之。不。註。之。不。小。
不。之。自。合。口。今。二。之。私。公。一。端。之。體。醜。之。出。之。少。一。清。渠。之。接。之。大。
盛。喜。所。不。見。自。一。日。不。遇。之。滿。足。十。萬。

日本人を激励してやつて戴く。誰が南北を假り、君達が關係する。

おおきい得た。君達も日本のかなたに日本のかなたに君達が

完全の日本人として、自覚を持ったのか? 駐同を、君達の中には思ふ
かある人を居やう。わが君達が中から眞の自覚の人があつて、

二三十人でして、出で戴る。

おおきい子をうなう。隨分語るが、多種の問題に接するので、どうぞ各自の意見
を悉く語り合ひ、十分僅か語り、意味を了解して、餘りの事は

も無く詰めとておさへ、十分僅か語り、意味を了解して、餘りの事は

贈り! 日本人として、自覚して、知らぬ人が!

かく偉人なる大使命を天より授つて、大和民族

理想。果は深遠哉! だが、その偉人なる使命

同胞は知らざり之乎!

歎く! ! !

嘆く! 日本人として、自覺して、知らぬ人が!

十二月五日(日) 晴天 温暖。

象庭草園へ礼拝の行。醉翁の聖号を以て戴く。感謝す。

今日晴れ。退園を早め。生徒千里未だ。是。驚く。彼女

入園二三月にして、全然成長せず。今度、更に

驚く。何處か、品の良き高麗貌。今日晴れ。解渴の餅。外皿食玉片手

に持てて、千里未だ。是。驚く。驚く。是。謝る。何と云ひて

彼女は主張の一人前か? 未だ。象庭園の偉人なり力加列矣。

入園二月。大部が良家耳。は限らぬ。かく如水の水。身不逞。君達も

皆。一人前の名前を取る。一矢。泻り出る。是。多謝。二三月。象庭草園。

童天香。便令がおのづか。便令が天香。便令。兩親兄弟姉妹。喜んで。笑ひ

便令。便令。便令。象庭園長始て職員。半小時之内。喜んで。神様か

更生した象庭園。子供。笑う。神様。かく偉人なり。愛。而力。おはせ。喜び

至り。自分。口令。二の精会。不端。傳體。出でる。一精。素の様。之。太

威。本音。前。自。一日。退。之。滿足。不為。不

書。飲。動。走。預。深謝。口。

方志潤等六十一島沖航空戰，大戰果，至

空山一天一早是更難辦！翻，底細一戰竟何益，勝，

今日船上各營餉，人糧特支，行不
食。是日天雨，暮過
氣冷天寒，山寒石滑，雨霽始，望寒
重，量石曉曉。

卷之三

70

廿二史劄記

不逞有三哉？有三體陽爻也。此三體陽爻，一主財，一主事，一主人。

其餘詩歌，皆不復存。惟有《鵝黃子》一曲，至今猶存。

新丰齋，叫玉戶之無底一酒底。唐詩云：小館招醉

勝てり酒會。勝てり酒會。
御子ナキモクノ保有年。七十歳。

通鑑

十二月八日(水) 晴

大なる感激の日より二周年 憶！二周年

光陰失如電，少年易老學難成。

但不知這大公之子，是誰？

日記
著者　二十九年
雪齋　せうしや
木思夏麿　むか

然其水亦重有小洋萬石之程

万葉の開花は東山の古事記待合期待の上人、是の頃張る。

早朝御宿東華門金匱候

武昌人謂之米酒。其味濃醇，無殊他處。

萬曆三十四年正月，步調公令其子前鋒少將軍

堂上。令列行進。至行進。宣東祖靈三卷。山

六角塔。青空。午後更安。微風立。霞。雷。雷。霜降。蹠。足。前進。健足。双觀。朝日。映。御櫈。麻。今朝。一。禪。主。是。何物。踏。倒。銘。告人。心。毫。鑄。血。汗。洋。今。舊。步。武。堂。盛。行。大。方。廣。史。日。朝。世。尊。史。一。新。紀。重。畫。大。仰。戰。威。盡。日。朝。

十二月十日（金）晴

寒風甚。

南東學院中學部 明和十八年度查閱是題

查閱官

東郎右衛門 部隊長 鶴田大佐殿

分類

國兵

軍事

成績

往。年。三。看。健。足。

意。氣。以。詔。之。木。之。不。

者。當。手。敍。碑。莫。圓。口。標。良。好。認。有。九。支。無。難。。

早。朝。于。寒。風。刺。之。鋒。快。如。。

銳。之。云。八。拳。之。一。致。更。重。不。仰。方。。

十二月十二日（日）

晴

今日。以。朝。五。時。半。少。年。田。神。社。參。拜。（淺。向。神。社。）

寒。風。刺。之。鋒。快。少。年。少。大。意。天。之。更。。

生。則。十。時。半。分。東。神。祭。川。奉。七。田。中。一。人。山。下。之。一。勤。營。奉。化。
以。赴。之。又。不。不。滿。胸。底。所。之。下。之。翠。翠。相。接。）

十二月十三日

晴

上。屋。戴。之。午。后。之。時。無。色。

甲 三度十二月八日立冬

眉喜

天も泣く。地も泣く。人も泣く。

天も震へ。地も震へ。人も震へ。

分の十二月八日立冬。朝がつて。あり時の一億の心は

驚愕。否。恐怖。否。霹靂。

否。希望。然り。滑刺たる希望。朝がつて。

お小玉でのあらゆる念想は可の悪とぞ

あ。一瞬の出来事。人。方。歴。朝がつて。

おより。早や二千年。又。せ。此。十二月八日。

今日の醉がつて。万物皆醉がつて。寢醉がつてやうが

醉がつて明がつて十二月八日。然る。静。中。脈。力。にて

暴戾。半死。擊がつて止がつて。朝

氣がつて。立。日。又。旭。光。映。え。ほんと。静かな。朝

示。し。躍。達。日本。真更。力。

醉中。有。動。帝。口。海。軍。然。リ。皇。軍。然。リ。

醉。中。有。動。二千。年。帝。口。三。千。年。未。傳。統。手。を

木。革。何。ぞ。因。心。醉。中。動。有。り。

自分。今。表。が。つ。て。人。も。到。底。取。得。べ。し。か。

二。人。の。力。あ。り。か。と。首。一。處。す。べ。く。持。つ。て。物。の。か。

自分。持。て。居。る。か。是。草。下。か。身。口。良。直。い。

言。丈。若。三。力。持。て。わ。ざ。

何。ぞ。感。激。と。加。十。二。月。八。日。一。億。氣。持。て。

否。感。激。朝。否。氣。持。て。

十二月十七日(金)

愈々、今日から日本音響株式会社へ勤務奉行。二十三日終業式前日迄、午後十八日休電日と休日との代り十九日(日)は就業。笠浦、田奈部隊、農泉、二俣川作業等、多忙なり。今学期の作業日割、今日より又一週間を加へて終止符か?

正月、作業がなくてのんびり出来ること嬉しい。

何うる般人の云々アワーのお出かけは辛い。

そして歸途の冬に優しく

とも劣らぬ混雑。日曜、産業戦諸君、舊吉野解説する余りある笠浦、根岸、三上、田奈部隊、(61)岩崎喜一、鎌本孝治、瀬谷、(62)等、勤務奉仕に行こうと思つて印象の深く人を含む沢山の人の中で強、頭、浮かでた小ち小ゆ人形、キチリ特異的個性質の持主たのが知れる。今日の作業はモテモテ、特異な印象。深く人々居る。手には? いきさ人、パン、ヤン、牛鳴子、殊の手には? K忘水手水の人物)。

十二月十九日(土) 晴。

往十八日は休憩日、代って今日の日賜就業。

朝より 強烈で能率百%の成果を挙げた。

そし爲

歸宅もまことに疲れて勤強の方々零。

八代の言葉を思ひ出す。

「君らは学生だよ。勤務奉仕を行つて、どう疲れても、学生健、本命

である勤強の方は平常を通じやうなくては駄目だよ。

強念であるが、本が言ふ事きかね、うろあらの口八代

も、瘦水だ。(眼)(裏)眼

机に向ひ氣力全然無し。火の用べと了つて帰ると、何も

なし。モフヒやりたりえけ充允あるのだが……

おお……(まことに)

感念! 口惜い……

薪品三

映画の海軍批評

松竹株式会社製作 演出 田坂良隆

萬葉、松竹二人在大根櫻原、萬葉在映画が丈夫に作れたか？

軍神の日本人の演技は如何である？

僕は二月二日好奇心を持て映画館に入った。然る二月二日好奇心の中

前者は僕の二つ疑心が十分ちこちであると云ふ。

松竹の三月、宮前・作田喜三・佐藤・松竹調 大船映画、壁を破る。暴春

近・元・春・演者者、並んで熱春 大本营半世。畫人の後援！

原作、余り、力弱だ。

三番目の問題である。谷軍神。

山内明の演技は如何である

失敗である。前半 無学校卒業前後迄の好演技は、極めて居た。

と向ふへ無難である。後半は、アラビックで十三日入る。壯年了(前半)

の彼の演技は新人の如き(中)重荷(后半)見事。思ひ合ひ

然して、その半面が、我らまで渴仰止むの軍神だ。極、身近な人々

中より、出ででてあり。軍神のやうな人間超巨人的な人物をやうと思子

我の考へ信じてよがつた。惜しいことに新人の重荷(前半)

のも知りぬ。然て、演出者と之の立場から見れば、その他の人知りぬ

音心が拂ひ去がまゆる。これが映画は凡人として云々する事の評議

力がもろい。だが、探る映画如今情状出でても、何が何が今日製作者

自身として、自重玉所の止まぬ。魏作の「元・春・映画」海軍の何を云ふ

一億塊の一大公爵で起つ時、一橋でも多く前線への心構え以て見せぬ

頭の下に了段馬である。手筋、力作、脚類に屬する成

次に海軍の於ける運命は渾成。有様が見らるが、その半面、どうかと思ふ

場面が隔ててゐる記憶である。その他、江戸と軍人との關係、隆太の

卒業後、人生旅路等、余り聞こえず、と云ふあり得るか？

原作には、つけて二〇。映画と見ても人口運のよがつて人である。

松竹今後、奮闘を望む共に、更りつゝあ。映画俳優の一層の自尊心

望んで第2指

十二月三十日（月）

噫！南冥の海を眞紅に染めて、海中かく大君の死を
水漬屍（壯烈玉碎せ）ミキン・タラワ而島準備、海軍
陸戰隊三千名、及公協力奮戦し、千五百名、軍属、
千名に當る、熱々本日三時十五分、大不營より、斧美三九
一億、壯烈、禪正三九、かくありと云う想にて居つて
とは云へ何等壯烈、我も歎して怨敵米夷擊滅せん
は止まじ、先にアリツ、悲報あり、今亦、悲報に接し
我らの情激頂点に達す。

火用火巡廻前子供溝組集令

對之、宿敵米恩父下打ち破りまく、決意至れ、御恩之舊す
云々かばと一唱、少白民の意氣、日壯なり。

柴崎海軍少將以下、英靈

今亦我軍ナリ！水漬く四千五百、テ某御靈子
遠々祖口を距ニ、數千軒、小島

數十倍、米鬼と一峯ハ屠

我身又敢然として玉と碎けし

御身も、紅真心は火と燃えさせ！

御身も、鎧劍立ち入り握らざり

御身も、愛する祖口、爲ひ了まなかつて

御身も、太君の邊に何物も惜しまなかつて

御身も、最後、雄叫びて、祖口にも響く

續々！断じて續々！

續々！

最後、完畢

續々！

噫！怨敵メリヤン奴！覺悟はよいか

四五百代、全一億、總突擊を受けて見よ

十二月三十一日(火) 晴

勤勞奉仕 第四日 晴 7 スキンカラワ・王碎と體一層の衝。甲斐と覺ゆ。二日は所期の目的に向つて、高麗道の事徒々に徒手空手拳手を數えてゐる場合にあらず。また朝うの時代はあるまい。きっと来るのを否來石け水はなしぬ。よし! その時二七 暮茶辰未鬼奴! 寶元居候。寶元居候。二の腕で必ず見参するぞ。此後三日。悲報に口尾の意氣消沈してゐる感。あり。二人の事では歎目也。一吉一真寔は戦卒。常。王碎勇士。元へやひなづぬ。車上六千人。必ず後は續く人々と期待して徐寔死に就く。期待に北斬か。總力を擧げて全身全力を擧げて頭強き。そがこそ南海の王碎勇士は眞す。

十二月二十四日(金) 曇天

噫! 待てぬ。全日本の若人は待てぬ。
二日二〇時 全若人は歡喜だ!
果たし成若人の歡喜は絶頂に達した。俺も中の一人だ。
潮の如く出で行く先輩諸兄の激しい氣魄に压倒され自分らが今こそ何をかじ晴れ。征とも! 断呼して
我ら、前途は雲霧の如きメリヤン野郎が構えてゐる。
我らの前途は無敵。前田三軍艦が沈没を待てぬ。
よし! 藤太翁の神口日午、光榮を躍進。將に生を享けし
二の感激。是すの祖口。十有八年。開平總督として無小失
祖口。二の祖口。日午の爲に我らの征ふの。何を光榮!
馬鹿野郎! メリヤンアングロ。迷制大暗愚櫻!
暫く待て! そり中一二、銃の一拳を受けて見よ!

さとし見舞ふぞ。ナリヤン。アングロ。

「俺は征かる。光榮を、祖口の爲に。」
「偉人方の祖口、島爲に。
全一儀、信望は双肩に輝く。」
「畏くも大君の御信賴は二ツ。
俺達は近隣の事。
海行かず山や川は、大君の邊にこそ。」
「勇んで死ぬる。」

「俺を行くを、お前ち來るが。」「うん！ 俺を行くぞ！」
何畫！ 亂世で生まつて、
不景の口、不震の口。
「祖口生活之様子も。」

（六月二十四）徵兵通鑑一年終下 满十九歳 檢査の報喜

十二月二十五日（土） 曇時晴

謹みて太正天皇祭・佳三日を迎へ

前、吉宗さんラバウルより輸送船補給の主任を果して歸る
輝くもの使命と無事一々果て、次の大佐の爲に二日間休養

が出来ます。

日々平の、男子も我也語は小む

すがり交つて克しんと見て、益。我も征かむ、氣を強く
す。若き人々が續々と出て出で行く。取引残さ川三威じ口
俺の心に一杯だ。

十二月二十六日（日）

午前十時より横浜家庭學園才三學期終業式
及午后一時より同學園Xmas祝会に出席す

降誕祭礼拜

一口民儀礼

一 説教「主の祈りは就く」有馬園長

一 頌

ルカ傳 第三章

一 祈禱

五分休憩。後第二部に入ります。

一 聖書朗讀

一 詞美歌

八八

第三部 合唱劇 遊戯 第二日を東洋にて練習で重山

園退ひ、一心不乱、演技の心も蒸かず

神様はほんとお喜びなさいに違ひ無

就中劇「良き才子」人情衣類にて食事などへ少からず感激
す。一所懸命に小芝草と合せ額々幼児の舞踊
之三と云へ前課の平孫さんへ感謝しつゝ衆一同時を迎へ
得て喜び、神様、實にお惠み何れ感謝してよしとうが
二小生

午餐会の御料理の美味しき天下一品。

圓南様者、限らず御観行、其の心から少く
前田先生の入所星居 懇作日々生生一二三十、器量が
うるさく思ふが云々

一秉ひり果て一日を終、感謝しつゝ退園す。

板垣も相手娘の見本、一〇五番を高唱しつゝ
ほんとに清々晴れ渡り輝く日生と仰ぎ心から生三日を祝
通締忌六時半

もうびし、空手の道へ丁度

ひさこく寺子屋へ玉の手手帳、主婦手帳

主婦、主婦、主婦

感謝

十二月二十八日(水) 晴

昨日山下さんから持つて来三餅と返す、持つて行く

そで青島のアーフに会ふ、鬼は奇遇り!

正月の運子ひするどり。然て大儀以来何年目か
約五年目、解道! お互ひ、成長の驚く

新小学校六年、別れ八年、今才子車内、一年

人残北鎌倉よく喧嘩をひきも多矣。然て今会ひ叶ひは
懷ふ、是懷ふ、當時、うつ(万事柄が思ひ出

三九、夕御飯、不景氣と飽走りた。

此鎌倉時代、毎朝のやうに喰べた大さな豆を思ひ出す。

此時 欲々叔母と歸る。(田舎へ行つての事)

片手す。換茶一罐。追日。健闘。お礼。戴。感謝。

萬事お名残。惜しくて九時半前終る。

一一二二一九日(水) 請。夕陽美し。

連日、疲勞でぐつくり。お午過迄寝る。倦怠。済心も元日か。するど高ひ三日。大いに並ぶ可。

午后から机上勉強室、人揮除二枚。然し絶壁なるに三分よし。人二三歩行す。價值あり。

アラリテ島討す敵。侵攻征戰烈熾。激烈。かくてロモン決戦。ロ

モ二船落入る。銃鉄。機動砲。弾量。又抗戦。高半身。

敵の量。對。我。固彈。爆音。語言。砲。將兵。勞苦。血。吹き飛

墨。主將。補給戦。忍苦。

銅十文。一億!

ニエドガと。ニエドガと。ソロモン王。量。量。鉄。鉄。鉄。

一機一船。一船。立ち多く増産。年。如年未。氣。今。年。吹張。世。

歌。伊勢佐木町。繩糸。見。真。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。ニ。

何。無。中。街。行。人。數。多。而。同胞。幾。百万。血。傷。

卒。苦。死。石。達。知。る。の。が。何。と。言。不。か!

知。る。もの。か。一切。わかる。自。肅。朝。夕。輸。送。接。觸。う。

混。雜。通。轍。者。諸。房。は。併。設。讓。る。か。夜。と。晝。も。なく。增。產。在。接。身。

主。の。生。業。勤。勞。戰。土。諸。房。を。想。へ。

戰。爭。の。恩。惱。而。出。來。口。民。が。勝。る。

君。の。日本。人。で。ある。か。

父。祖。傳。未。侵。さ。れ。か。口。日本。口。民。で。は。な。く。なん。の。二。世。

忍。べ。ぞ。否。否。忍。て。付。小。心。貢。け。る。の。だ。侵。さ。る。の。だ。一

炎。焚。草。種。口。が。侵。さ。る。

三五。お互。二。頃。張。る。

神州日本。口。民。

アーティスト。共。買。け。て。不。まる。が。

頃。張。る。そ。して。一。歩。退。ま。る。が。

お。立。二。日本人。

アーティスト。共。買。け。て。不。まる。が。

頃。張。る。そ。して。一。歩。退。ま。る。が。

十二月三十日(金) 晴

偉人なりし昭和十八年の今を行く。

山本元帥、散華あり、アツ、玉碎あり。イタリヤ、パドリオ政權の裏切あり。草徒徵兵、艦隊停止あり。否、草徒出陣あり。

ボーゲン、冲太戰果あり。大東亜會議、盛興あり。

ビルマ、フィリピン西口、獨立宣言あり。生シテヨラソニヨシ、兩島守備

陸戰隊、玉碎あり。

徵兵年齢、一年

依テ、下

かくして決戦、昭和十八年、暮少て行く。今ニテ、過ミテ行、

何が、得体、知への大きさも、さしつかり抱いてゐるやうだ。

次に起つべき躍進、時、は、脇二枚ハサシ、まじめらるやうだ。

噫！ 何もかも昭和十八年の退至去つてものは、大きからず。

きこえて、人々、大約三年は、今、辭かに過ぎ去らんとしてゐる。

辭かに！ 美は辭かに、帰らに、得辭かに！

躍動する前、辭かに一時、

何事もなからやうに辭けまど！ 小が見えて、詳ひの

昭和十八年をひ。

さうじ！

決勝、昭和十九年、一歩を踏み出す

新走日、明日だ！

決勝

昭和十九年二月、吾等一億

決死の進軍、於テ、ハ、今此モ運に

船隊かに、退至やく、

昭和十八年を送り去る。

然し、ハ、余りに辭かに。

帰る程、辭かに。

三二〇
一一一

○限りなし東洋四方に、ハ、

人和島根、ハ、ハ、

○西より酒玉せしる程も、心せず。

神のまもゆ、いまよ、喜ばん

昭和十九年一月一日

田舎がニシ花と朝りにこなす所を

見せばやと思ふ。御代の春かな（加納諸平）

寝みにし吾大君のこまざる

御口中ちかに春の来にけり（八食鶯天）

初春、初日から小神の

神のかやとあづけ 諸

（荒木田久老）

春にあけてまづかる書も天地の

はじめの叶と讀み出づるかな

（橘曙覽）

新こそ年のはじめに豊・年

しるすとなるし 雪の降水るは

（葛井諸合）

太へなろ「是」且 今ほりのと明け初め。

小さき堂宇を合せて拜む童心はとのへてゐる。

（天地）

何ぞす壯麗なる みをせんれ 生けしるしあり セカセカと

にあへうく思へば しつとりと宿を帶びて 二日、街口

家口 今 旦暮行、太陽は 登りゆく

子供達は 繁榮一と 拝んでゐる 征きし父兄 亡くろひ父兄

よどき、二の私と 育んで異なまること

首難ふざま

子供は 眞劍と 拝うて 上げて瞳と 真懇切な

瞳と瞳 彼らは 泣きみだる 深い見えぬが 彼の泣いてゐる

大口難 中に育つねら

深刻な物質難の中にも

彼は 立派な男でゐる

稀うて 自分と考へて

俺は泣けて（ 仕様がなかつて 徒に十有九年身の向 他人の作

粒米布匹を戴き 宽大無比、而代も上、何一つ不自由なく育て

て、今ままで爲すことをなくしてゐる自分！

上 ● お許にて、神事お東山下さる。

さうぞ。二、俺は、三、いたずら子供達、爲めに死なせねばならぬので、

二、子供達、一、大口難、中にも立派に育つて男水である。

二、子供達、甲子夜の口を守つて景氣を決めての。

三、清水さる、神口の大盤石が、さうが、俺はもう二、子供達の

爲は、死ぬのを、娘！ 徒然十有八日、もの間、二、

何事！ 俺は賣物ものが、断じて征く。

何一つ不安なし、平安に暮れて男水で、一、我が大君、二、

三、偉大なる祖口日本、爲は、偉口恩返こと可子也。

意！

感謝

元旦記

午前八時四十五分 集合(中庭)

午前九時 新年祝賀式舉行

東京學院全部門 參加 大講堂

君がが、一、二、三、仰、今日三之、尊十九

一月二日(日) 快晴

漸けて行は鬼神亦之を避く

一月四日

軍人賜りたる勅諭御下賜記念日

午前八時より、学院合併、盛大舉行

一月五日(水) 晴 徒零

新年宴会、佳三日。

午后より伊藤さん、信義さん達と上京。先毎日天文館見事。出で九内日映劇場にて觀映。四時まで打合せる。日本橋三越一階ホールにて伊藤さん夫妻及云々の人大妻と今云直人形町未廣吉)に赴き九時半果て笑ひ續く。柳好柳橋(左栗(休))始め大小ハナシ哀連中。ハ風謝。午十九時頃出る。

一月六日(木) 晴

有馬氏宅訪問。並て打合せ中、新年会を開く。大口賀旦食会。且、饅山・氣・合云々同志一日中遊ぶ。

一月七日(金) 晴

ひねもすのなり。

一月八日(土) 晴

第三學期始業式。午前八時集合。現長訓示内容。

「今朝一大決戦。秋草本道にござる事、出来事の件、三水一童は大歓喜。然う便玉と云ふ感謝、主導を擡げて努力せり。我ら全力を奮って敵米更粉碎。意義を新たにし。」

「一億總力戦。陣頭立て。決戦に勝利を圖るやう努力せらるべ。」

下て 大詔捧讀。

教務報告あり。

新任日漢科昇代、挨拶あり。了て 校庭集合。分列並び開兵事。

大口 決戦下草従の志義と昂揚す。

一月九日(日) 晴 晴空モク刻より曇天 雲行。悪し。

上海、親爺より來信あり。決戦下草従との東令至尽。家と争ひ田牛助をせよ。あり。直に反信と書く。俺の信念を打明す。人に感激しつゝ書く。之を親爺何と言つて居た哉? 河合・叔母さん来見。夕刻退院。

一月十日(月)

夕刻より強風

第六期限天下代大人に皆を激励す。

「決戦、平は君らに取つても決戦。平である。

二年間君らは絶対に遊ばないで死物狂ひになつて勤強せよ。夢中で微用三事ともと勤務奉仕に引張り出立ても良し只一心になつて勤強し。その時が来立つて勤めんでもつ家の危急存この時に勤せらる。するだけだ。

これが親附連がな。気狂ひ三事もれて見立。少の位勤強こそ

その位勤強こそ看立すが業遂を得る。少毛三組を

立毛、僥幸も強いよ。お前輩を張り印れ。

これが約束こそからう。少年が辛う通じ。早く大人にならぬ

誠心であれ。少年の元持く。これが頑張れ。

一同大いに感激す。畜生！ 何が何でもやる。

断じて行へず。畜生！ 何が何でもやる。

あと余すところ一人月！ 一年半！ 総力だ。

何が何でもやるぞ。決戦昭和十九年。意義深し。

頑張るぞ！ 負けたぞ！ 畜生！ やる。

一月十四日(金) 晴

ラバナルに対する敵の侵攻愈々熾烈！ 今月に入り來攻敵機
傳延機數百百數十機。在ラバナル我部隊の辛苦。歎ひて
勇士たる要請。元へねば方々。一機で多く一刻でも早く進まう
勇士たる草木を嘲りて。心機工持て報復を期してゐる。

十一日備用令二倍り東京航空計略。入所にて。身筋不調で
歸宅。何分、沙汰あり。家で静養す可いとの命令。

じーと一年を澄まして二らん。 庫えるだら。

一機でもいいから早く、（ ）と言つてゐる勇士の声が

足りない。少い。勇士達は苦しい。

私がじーと悩んでゐる。勇士達は知つてゐる。期待してゐるから。

「今は内地の人々が頑張って旱魃を結局が、深山の飛行隊

がつて、（ ）送られて来る。（ ）や今まで（ ）

三ヶ月。期待を無にしてよるものか。否。

二ヶ月で、（ ）に来たのが結構である。軍任務ですか。

じーと音を澄まして二らん。 庫えるだら。

「書。疲つかんだ。まあ、又働く（ ）と言つてゐる。戦士の声が

須賀のものだ。産業戦争は死物狂ひだ。

書は夜もなく、働く（ ）戦士達は知つてゐる。期待してゐるから。

「今は、二、飛行機で、前線の勇士が戦つて旱魃。憎（メリ）」

飛行機で打ち落さざるを、とうちもつしまつた（ ）。

三、戦士。期待は需（ ）ふる（ ）直に（ ）

二、戦士。燃えの心（ ）（ ）手つときつと報（ ）ふる（ ）

前線、鎌後一丸。燃えて轟く二の歩調

今、決戦の時來る！

一月十七日（月） 晴天 寒風

今日より耐寒鍛錬馳走行道同様

本日 午後授業無し

歸途 大下さん、金子、彼曰く、（ ）今日はもう終りかしつか

やれよ。 余曰く、ハイ、やります。

書評

○ 大原幽草 高倉テル著 長編小説 下巻

自命は二の本王二の間の日曜日朝から讀せ始めて、夕方迄で足譚にして、其確かな面白が天未二の所に於ては随分深山の處にある。

自分は久しく小説は避けてゐたが、一本を讀んで又別々の小説を讀まなければならぬ。

世間只說農業組合，這三點也轉化到生涯。從此以後

心地がよが良い。非業ひごの加け。二小にこの仁者じん。半生はんじやう。

幽然、深雪然、主蕙然、作石然、

當後自合小痛切止成。

想。作者特有，筆風亦各不同。讀者當以其意為主，不可執一端以取舍也。」判語。余之「遠緣」、「跳子」、「工」的詩。

外客連・語學もう少、簡単な巾着をかきながら?

余謂加多過半

又詮詣中不滿其事
結論云夫祖孫組合成立近一千年。師提宗的而子之被付之

生活。飞除之。此草加果土。任人拾。一
然。除去了。僧人。浅。更复。如。水。而。招。介。生。至。

作者の努力は偉とすべきである。農の口人本である。

多く人が讀んでゐるが、もつと多く讀んで来る。

昌黎先生集

一月十八日(火) 晴天

晴天

在モルガヌア、大會戰、未襲敵機三百機。甲一二機（五割強）擊墜
又、米十四日、戰果二更三十三機、擊墜一加一、合計九十九機、擊墜。
正二怖可シ、海軍、敵機振り、不日、大本營より命令至る。
吉九、感激、更ニ強増す耳。
才一駆、特別幹部候補工兵、陸軍、海軍、陸續總參謀、
人会口、明日市内四下、當徒王、重臣、松竹院、馬場、伊勢、
金修、當徒、モウ、兩處で才一駆、駆、參下ス。特幹二名、軍令官、
吉九、

期待已久。唯一一回。逢了
一月十九日(水) 快晴。

特別幹部候補生志願者徒然に起大會。松竹映画劇場にて、南進三日市内四千空席を前にして、中村内政部長、平田少將、熱闘の振舞。諸君の奮闘を第一線に起し、全力を奮闘せし戦士下士、及ばず乍ら私請君の乗車飛行機口引受けまじる。鏡流は在る者、諸君、奮戰と期待せし者多矣。

絵の映画　監督　母　觀映　解説正午
午後六時出征軍人家庭慰安会　赴く　又映画　もう萬葉子
兎強　（のうきょう）　運んで居る小室百合子

解卦正言

映画短評 大映作品「萬・母」

二の映画は中心人物。一少年が日暮に就入學する。少年飛行士志願者合格。
鄉士訪問飛行上焉す。卷頭書面。 三四年後、少年の母親。
旧世想を脱し、本家の祖父、古川口人然生にて子の子。医草学。ハーブ提携。
正子。和尚。昇る。少年成長期に於ける種々の出来事。メモ録。二年もので
ある。題して「清音・萬能・錫打」。限り無く。因。慈母。仲が行く。只一人の子。
ナウキ。呂吉とて。下君。捧げます。その子が郷士訪問飛行の晴れ姿。迎へる。
郷士萬と一同の歡喜。二の切妻二の映画が組つてある。然る。肝腎の
場面へ来て。翻空。中から微笑。笑ひ。南久石は。何故か。
余りに飛空へ過ぎて。本家・祖父親子。丁口。腰掛。方からか。

周圍、五月蠅^{アブ}中^ハ在リ下^シ立派^{ヒサシ}一人子^{ミコト}ニ上^{シテ}大空^{タカヒコ}
捧^{ハシマ}ル母^{モチ}口辭^{ハグマツ}アリ。又半水^{ハナミズ}給^{ハス}ル移村春子^{ハラムラヒコ}の好^ハ漫技^{ハシマツ}
寺^{ハシマツ}和尚^{ハシマツ}給^{ハス}ル小移勇^{ハシマツ}ハサハ相待^{ハシマツ}素晴^{ハシマツ}。中^ハ嘗^{ハシマツ}入^{ハシマツ}試^{ハシマツ}
不^{ハシマツ}落^{ハシマツ}。薄^{ハシマツ}暖^{ハシマツ}ニ^{ハシマツ}少^{ハシマツ}年^{ハシマツ}慰^{ハシマツ}勉^{ハシマツ}。和尚^{ハシマツ}小^{ハシマツ}當^{ハシマツ}
先生^{ハシマツ}アリ云^{ハシマツ}。 暑^{ハシマツ}者^{ハシマツ}、初^{ハシマツ}是^{ハシマツ}粗^{ハシマツ}。 12
12 余^{ハシマツ}リ長^{ハシマツ}過^{ハシマツ}。 石^{ハシマツ}火^{ハシマツ}。 12 ハシマツ^{ハシマツ}合^{ハシマツ}。 12 陳^{ハシマツ}画^{ハシマツ}。 間^{ハシマツ}隔^{ハシマツ}。 12
外^{ハシマツ}水^{ハシマツ}屋^{ハシマツ}。 室^{ハシマツ}草^{ハシマツ}。 12 小^{ハシマツ}屋^{ハシマツ}度^{ハシマツ}。 12 12 12
寒^{ハシマツ}風^{ハシマツ}。 12

一月二十日(木) 晴

今日一時歸定于了。

三
二

長年の故母さん來訪中

三
中

自分の成育するに 難かで、南洋は自分の二の故郷として一番
御世話をうながす由 から 成長して三ヶ月の時合、車を乞ひ小走り
頭の上にぬれむる). さて(一)御世話をうながす田舎の御健康を祈つて
止まぬ

彼奴は學校の屋上で僕に語った。
君、僕は決めて、僕の進路は決った。君よ、僕、細々と懶け
解決した。僕は煙草と煙草とで仕様がる。解決の光明は
僕の前途にあつた。すゞ僕があつた。僕は知らなかつた。云が
今は何もかも決つた。君よ、僕、吉吉の如何に大きいか、察して呉れ
かく力りしかうは僕は只實願強引の外だ。君もどうか所待を

彼女は夢中でうな語る。值は一所懸命商ひ。
そこで彼女は寒風を吹かせ乍ら、じいに港の方を見られて、
瞳は、何やら鋭く、何物とも空き通するものが溢れて、眼の
若々しさを解して、事が出来て彼女の起立儘動があつた。
彼女の底知れぬ頑張り成功を彼女の側から祐つてやつた。
船が一羽中空をかすめて野毛山の方へ飛んで去了る。
寒風は頬を打たせながら彼女はまた動かなかつた。

自分は間違つてゐる。自分は知つて、總てを知つて。

情なし、自分である。馬鹿な自分である。

愚かな自分よ。恥ぢよ／＼生れ変れ！

それでもお前は神州男子か。濟すませぬ。

噫！何という馬鹿が自分ぢ。くらばつてしまへ。

今迄、總てを打拂へ！そひでなければ死んでしまへ。

之を念！邪想！自己満足の何物でしかなかつたが

誇張！憚心！何ぞ羨（うらや）め！

噫！俺は知つてのう。總てが判つてのう。

馬鹿があつた。馬鹿じあつた自分よ。

今こそ清新な氣氛で引ひ切つて。死ぬ近ひ。

19.1.20記

倒れてもよ。起き上れぬほど。誇張り抜くのう。何ぞ。

一月二十二日（土） 晴

曇つて寒くて嫌な日。早く暮春へしてしまへ。

お子けに足が痛い。嫌な日。青年同の詣うなしが

ある。嫌な（一日、鎧鍊会の事）前田さん一行がわざ

ならぬ。ちとどうしゃうか……。

一月二十三日（日） 快晴 溫暖

生れて始めて憧れの故郷に行く。父や叔父始め細野一族登場。地を見て、我太に感激する。あの山、あの川、あの森。總工が喜んで、新家で駆走になり、歸途、祖父母始め一族、墓所へ詣する。眼了一門の人々・靈廟見舞し、じつと祖父の墓前で新郎は何を知らぬか胸ぐれと込み上げて来る。

そこで心中に前途の安穏を祈る。そして、この日からきっと成人として顔をます。きっと偉人になります。大君、御役にて人になります。そして一門の人々、供養玉をせて戴きます。どうか清水達二の私を守つて下さ。ヒ祈つて。生れて始めて祖先の顔く感歎

未だかつて、

二、御先祖様、爲め、自分で死ななければ

ならぬ、御先祖様に御恩返します。

三、偉大なる天地に生を享け下さる御先祖様

まことに、御恩は還ります。どうかお水までお守り下さい。

(附記、自分口経日必ずや祖父の始祖細野一族の菩提寺へ参詣せん。

大徳善会、南僧正高陽門で行水事も誓つて)

一月二十七日(木)快晴、久方に仰げ青空

祝、南東学院創立二十五年

午前八時より人講堂にて紀念式舉行した。

午後、鎌倉の宮井・家家と訪ね、彼病床に思ひ入る。

也門、勉強が面白くならない。何より自由学園時代の猛烈に

遅れての三四年の事、今小が二十三歳で天下へ八代等、車中の

結婚等、古強音の自分が二十九歳(一九五〇年)新参の

彼等問題では、全然勉強する気が無い。

「どうやつても判らない」判らないものやつても仕様がない。學校へ

ハートしに行かせたい。歎びてゐる。

手紙、激励してやつて来る。三人の方意久地なは二つの駄目だ。

お互いに男だ、死ぬ迄やれ。そこには花が咲くのを

至於人、二と手世話をやけ。二、自分か? 三、

自分口心うだ、浅向い、どうしたの? 自分口

決戦の二月四日、四日!

二月一八日(七月間)三、偉の戰機

一亨一文アリヤも搖がせます(三)也

米糀、頑張ろぞ品。



一月三十日(五) 晴 寒

午后、雪谷、梅叔田さん見を許す。叔母さん進み人

田舎へ行かず、叔父さんと叔父さんの学生時代の友人とかの人（非常三輪侯）

と（話す）。皆そん變つて（自分、成長は？）こまはれとのには少からず驚く。

鎌倉、泉一車3水石時、自分で丁度小学校四年生

自分が先頭になって駆け出すと、後から悦ちゃん洋子が走って車つけて来る

ニセコ田心山出で、あれ以来既に紫星霜、光陰如矢！

今晩全く判らなかつたる、大いに詰めり、且つ是と旦の食

膳（初対面）、雄辯口津、俺は不才勿々、更に叔母さん

立派な膳、口感心不ぞ、自分も初一頃は田舎人、叔母さん

膳（育つもの）然し今は徒ら……、噫！ 口惜い……

俺は俺はやうのぞ、飽くまでやうのぞ、愈、明日より

二月一日俺は出来ずのぞ、凡ての人が俺の成人を待つてゐる

吳小弓のぞ、ニク、穢、俺、成長を待つてゐる

僕は死ぬまでやうのぞ、ともかく、口は僕は男ではな

然し今日一日遊ぶ、心中は誰人か、感謝

人時一丁過ぎ、久々、歸る、歸る、歸る

二月二日(六) 晴 寒風烈

雨あがめ第三日、大体順調、歸る三時、午后十时半迄、おつづけ（無説合事首

二、調子（）、又明日

敵米鬼、エーヤル近進攻玉表、不敵なる哉、我口精銳皇兵あり

今見て居心！ 大和魂、敵鬼擊之、莫竹て見よ

愈、空船坐至る、來るる東北、待つ所と頼玉、神州盤石、構へ

侵すもの力と侵すて見る、一億、一九、体當り、今着々と準備成る

かうだ、今少く、きつと、（曾て居心、其儀で歸るぞ、か

岸之前、静川、二ふぞ知つてゐるぞ、今（汝の、眼前に

夫和男子、熱血、泣乳毛物見せて暴れむ

二月三日(木) 晴 時九雪

議会に於て 女子徴用の問題が 議論された。

東條首相曰く「我國の象徴制度を保全する爲め、女子徴用は行ひ得る。」
三月に對して議員側は「皇日勳勞觀は是正の日下、皇朝である
勳勞第三は皇民として最大の名譽である。」との最大の易譽會、
勳勞回賜の賜ふるべし也云々 とし。現代、女子の苦勞にて多難會、
三月勳之書下すりある。政府は速々女子徴用を斷行せり。其處に
「讓子」拿ま不許也。時機が早し。遂に東條が明るい一步
進む。辨明する。果して如何なる事か? どうか?

愈め後五日より、暗渠排水工事を勧奨奉仕。於小松中山方面
予定。狂おふ未だ。致意の方々は欣然参加すべし。

今夜は火の用心夜警。 寒風吹きまく。 然し(

二二六 甲子の 本日調子好し。 二の調子好し。

二月五日(土) 晴

米鬼エーラル諸島、タヒチ・ルオット兩島に上陸す。

見え。神州準領土は今半鬼。足下に踏まれてしまつて。

二重鬼の誰がし出かしこいか! 一億石。一億が誇張うなづからず。
神州人和鳥根三千六百年不可侵り。口の津日本土は今も侵さざるが
一億石! 祖先の御靈に恥じよ。敵半鬼。織ぐは足下に
踏み碎かれる。世界新秩序建設。有るの建築家と建築士
何が有利也。 三井山附者。今は歩一步進みつつある。

今度、網羅王峯下に奮起する。頑張る所。

噫! 斷じて奮起才可也。 番下奮起。

本日より愈々暗渠排水工事を出動す。エーラル諸島軍上陸す。

「報喜」(一層傳言) 乗組曲折。愈々難星。

少年團の合併問題。辛酸曲折。愈々難星。

二の原因云々 綱領。中所内会不歸和の原因云々云々。全く

六點三事。

高志。俺の國云々。

月六日(日) 晴

田さんと渓野辺の井上直造氏宅と訪問す。いろく・告別品に花が咲き、夕飯と馳走になり。歸宅七時半。

月七日(月) 晴

不穏な激闘愈々激烈。敵米鬼驕勝に乗じて進攻は遂に収束し、

達成。我神州の聖地断して守る。(一)

暗渠排水動員紹介順調に進む。然し歸途電車の買出で部隊の猛烈

な攻撃は一体何とかなるものか。

日本人の本当の想を見せるときがきた。敵米露兵の萬千はもろ日本兵に見参りして悲鳴を響かせてゐる。しかしながら日本民族全体。本当、想を見てやる。

日本人と雖も本当に自分の想を見ることはとう幾度もなる。日清・日露・役日

ニルからヒンノ所まで戦争は勝ひ。弘化四年は皇紀二千一百年、六百六十余年

の昔であり、眞の日本の想がよく記録されてはあるが時代へ距り過ぎてゐる憾がある。

民族は悠久であり、特に世界に冠絶する純潔さを持つ日本民族は、あり想と

必ずしも違はず再現するは違ひる。現に比較的近い三〇干歩後、十年間はそつ

古鱗と見えた。その時、日本は決して隆きはしなかつた。波サモシナガラシ、浮か水もししな

かつて、黙々として云々爲すあると期して支那事變後は、今まで多く人東亜

戦争に於てからも日本はニルまでの相手に隆き、四方八方の惠ともう少し

何をどうするかはるゝまゝもつて廻つて、本当の想を見てみる。次とくる。

本當に想る前にさういふ般陋もあるのでから、それがハリケンがつとはハリモ。しかしニルからも

そんな調子で、日本はつひに思つておることを忘れて、忠実なる民族になる。

何をどうするかはもう考へておる。論調する必要ある。

想心頭に發して、想かるニシテ、自覺せずに一路実践して、しかも誤るほど至らぬ。

朝鮮を擋る、歐洲類の想なるが故に、以外の何物ではないが、世界制帝朝と云ふ

大吉餅に張りつくこと、あつまじきがある。日本、想は歐洲類の想、いや、呑えること

を少西多となるべ知性ある人の間へ世界無比の優秀民族、眞の想の小字書とニルがう

全世界の人びに見せよう。

十九・三・廿日付

毎日朝刊

二月十四日(八月) 晴

彼、鎌木某より返信來る。彼熱心に入り人物なり。

僕と評して、敵對的皇民觀を把握せし小笠の外末京教徒は長い文句を打つて、その皇民立派、何うて識らず自證出来得ず。又奉承する。何うとも云ふ。廣いことはどうから、長々と下らぬ事で解りて又出でやう。

庶民の温熱の大快感、中には何うて、今の中では得た事の出来が、或物を求めてゐるが、と結論した。

二月十六日(水) 晴

女子挺身隊の記事は近頃の新聞紙上を賑はしてゐる。

愈、口艮總動員、秋、せなりとも戦士なり。敵米更。婦人の生產の奮闘にてかく。吾大和民族の光榮焉と躍進、然、せなりとも斷然起らねばならぬ。戰局は、生易いものではなし。事を銘記不可。

女子挺身隊の人員、如何万ど。三、鶴村乃堂曰否猶曰、真心に至る。叶其只口。爲、捧げ奉る狀は今在て。驅逐米鬼の徹底的全勝奉旨喰合せ。其時復興大業。自ら智識階級を以て任す。勿論、深く理解して子サア櫻木の経営口に、一丸となつての道軍を得。

映画評“旗を擧て”東京作品 阿部豊演出

日比併價合同、米兵捕虜多數出場。此島派遣陸軍報道部後援演集

陸軍省後援、文部省相應、情報局協定日良映画參加作品。肩書曰、日本も

一息の映画が、不運降りて、二の映画、素材、脚本附、選手、断片的と
運び口、自分口、一息も二息も、演者、血の運び努力の各所に見らる

米兵捕虜等々少くまで便り上りて、点呼等、取組み。

●二の映画、題材は、皇軍占領下の支那、狂風猛雨、巻く煙草、こじ下へ灰墨の星夜と画す。情の薄い弱者と強き一人道の仇と対立する、正義と非正義の激烈な搏戦を描き、そこで、米兵、残虐に倒さる。此島兵の目玉おほふ不思議と画す上りてかかる。

日本俳優陣の比島能修博士は、本日、演説にて倒立小太郎であつたが、中止して、連水部隊參謀として蘇田進の毅然たる態度は心に残る。畢竟の人間の運びもかく、演説は全く知らぬ力がある。比島能修と共に、其演じた萬理である。それにもあり、比島博士の名は、アーヴィング・日本萬理博士の二種をやつてのける。子爵の居る分、何事か、大東亞戰爭、眞の道義的意圖、馬鹿の仲間博士上へ、薪水が叶観一人植ゑつけ、功績は賞付けてよ。アーヴィング博士は、一步譲るに至り、残尾種の比島博士は、少くすす義理を、餘るは、アーヴィング博士は、餘るは、感心するが、その中に於て、インディ安長にて、下川平人郎は印象に残る。今後、彼の跡を俳優は並べて頑張れ。而して、門弟の如きが俳優にならね。

経りに、車室以降の標榜映画を造り、何故、元祿忠臣蔵、草野天衛道のやうな映画を造るか、判断は苦いのである。附記一二、(四月五日)

十一日(月) 晴
寒風 初日

トライック未襲米鬼遂に撃退、忠勇無比、皇軍將士、敢闘は善く、暴戾不思と云ふづけられ、云々、吾々は心しむけ外せば、十分、米鬼は必ず来るに違ひない、思ひ上つて、彼に生つて来てや！

今日大本營幕僚の更迭斧表、軍令部長永野天師、參謀總長杉山天師、口才と辨められて、天師府にて列せん。常時軍械師と御補佐軍上へ事務官、後任は、東條首相兼陸相、大島田海相、親神生三。

今日大本營幕僚の更迭番表⁽³⁾。軍令部長永野元師、參謀總長
杉山元師の夫の辭め水⁽⁴⁾、元師府⁽⁵⁾に列せん。常時軍械師と御補佐軍工
の事とす。後任は東條首相兼陸相、大島田海相親補⁽⁶⁾。
愈政治と軍の一體化なり。一億萬⁽⁷⁾で口頭打席に通過する時、二の更生は一
注目に値するものあり。

二月二十六日（土）快晴。

噫、南海、小鳥と眞紅に染めて、水濱に屍六千五百口。
遂に玉碎せり。ニシヤル早備隊ルオット、空セリン兩島、勇士。

今日も明日も戰闘の苛烈の度を増す耳。

ルオット、山田道行少將以下、ノゼリ、秋山内造少將以下、
狗口、戸靈六千五百、宣義下し。

悲憤！ 言ふも涙、聽くも涙。

二の悲しき、二の憤りの中から、次々日本が生れて來る。だ。
維新、志士の言葉は、取も直さず、今吾ら、心中に漲る。

神州を守れ！ 斷じて守れ！

二の日、勇士玉碎と時を同じくして、非常動員要綱、翠表三
正、待望！ 二三を待てみたが、口七切で何、草向ぞ！

何を措きて戦勝か。勇士玉碎から救ふぞ！

昨日、海兵教官、講話と思ひ出玉。

「皇曰。興廢の唯、君、青年草徒、雙肩に繋がれ。

伍は断じて突破玉。断じて行玉。

二の人口難の真只中、二の身を投げ不二にて、何、勇士生小生之。

卒乃了哉。天地の恩愛、天地の恩愛、天地の恩愛。

天地の恩愛、天地の恩愛、天地の恩愛。

二月二十六日以降 どうでも書けなかつた。どうやう誤か知らぬが
どうしても書けなかつて、書けなかつて、書きたくなかつた。書きたくなかつた
どうやう誤か知らぬが書けなかつた。

三月十四日 松亭遂に諒西田に疎開せり

二の日朝未の降雨に移轉、断念せし。一時牛車の到着(ナリ)
依然本調子(ナリ)。三時半積止み。途中軍用自動車に接触(ナリ)
長坂を苦難(シテ)悪戦苦闘。未遂。同日暮夜中十二時半
新居に到達(ナリ)

三月二十四日(金) 曇天北風刺々

我軍印度へ侵入せり旨 大本營聲表焉

堂々印度口内を征く無敵皇帝の威武 加小了に感激の印度口民軍
の志氣 盛矣哉

四月三日 神武天皇祭(月) 日本晴 曙氣溢

午前九時より支那鍋のア造り作業 息(ヒトコト)出走

十時半頃平告中、梅叔母さん子供部隊来亭 悅(ヒカル)部隊長(ヒカル)洋・信・勝・爾連中晝食。後大谷の庭園の人定へハヤシ葉野菜

玄蔵(ヒカル)行く久(ヒカル)のんびりと人(ヒカル)浩然・氣を養

連中もすっかり田園の気分に體身心共に溶け込んでしまつて
うい。モルカリ街の方へ出て行ふ。魚を始め種々珍品?が手に入
悦(ヒカル)始め大喜び。傍(ヒカル)見て居ても嬉

ス。夕食は待望のカキフライ(但使油少梅叔母さん手もつても)又之を歡喜(ヒカル)連中大喜びの中に午后八时十三分
構造線で帰途(ヒカル)神石、ふ土産を共に

四月四日(火) 晴

始業式

新入生三百數十名を迎へ奉行(ヒカル)

於大講堂

今学期より大いに校内全般に亘り、刷新が斷行された。

口民儀式

正午準兵營化式、失火、午前六時四十分校庭集合直ちに口民儀式、勅語、勅諭奉唱、後一般体操加農耕三小時十十分。人講堂に於て礼拜、八時三十分より授業に入り、教官移動、際は正副取締生徒、

指揮二從事隊伍組合、校内外工向は生徒心得、徹底討り

勅諭、御精神に生る院長訓示、ヤツブ書面草十七節「人善行不行、三知りて之を行ひれ事の罪なし」自身に体し、總て行動一二聖句正

表現し、又絶対服従、信念に生じる之等、事は東洋年中、

標題にて、學校即兵營、草徒即精兵、実踐化計三百九

告示あり。今迄、自由たる草園、平和たる草園、綠の草園とも

戰雲漲り、半兵衛威武、砧叩かず、軍躍之を浦至止す。

而今平洋、戰局を始め、我國南洋方面、北洋、東洋、印度方面等

戰局、變轉日月、苦しう云々、大日本勝利、大信念以

微動かしむべからぬ、我國三千年傳統、大和魂なり何如か中世人

何ぞ怖心人、未だ云々、半兵衛、我國注目近人哉もの、

汝らが軟弱思想を以て、我主を憲んじる事夢、破小云。

我主の目眞めに避ふ云々、日進歩時、力、知れ。

元外の口、文化、草と並んで橄欖、少半達口今第三

八祝、一字了の白星祖の歎きその生命と體人を雄々と起上つて

生じて、汝主が注目之外に之をも直訴にそく主命一助として更よ。

何ぞ、健児の、血の雄叫ばず、坂田院長は言ふ云。

國東草院創立以來、校訓「人」勿外、奉仕せし、以今云々、眞面目正

脊揮手の云、只一箇官、勝利あるのみ、歎き之勝の云、輝き云へ立起

ス之三、④校訓「生」生るのみ、之戰ひ敗るて何が草間に

立派に立起云々、橄欖の轟々、乃づ、櫻花は

大和勇士の熱血の血潮が、息吹が生れ、照り映えの云々。

四月五日(水) 晴天 総好、お天氣

本掌期方一日目 何事もなし 教科書不到着で一向興味無し
騒^の。旧二組の連中(註 本年度より從来の三組制度(優類組)廢止)
全く、^は平均省力に組が縮成改組^{さう}し、旧三・三・二才^かカリ分裂^{ぶつり}し

田中、飯村、船倉等、同志と別^{わかれ}る。面白く^{おもしろ}一日

五月十一日副級長^{ひきゅうな}任命^{めいめい}され、又^{また}嫌な事^{ごと}が増え^ふる。

一條、誰^だが三組制度^{しきじゆ}を廢^ほ止^ししたか、八木^{やぎ}、伊豫^{いよ}が教頭^{きょうとう}か、何^{なん}ぞ^ぞ迎^{むか}ふ
分子^{ぶんし}は過^{すぎ}ぬであ^まる^ま、又^{また}思^{おも}ふ三組の懷^{いだ}かづき全員一致^{ぜんいん}一致^{ぜんし}、気風^{きふう}が漸^{せん}
漸^{せん}て柔^{じゅう}らかになり、そこで軍人組^{ぐんじんぐみ}の火^ひ出^だすやうな猛勁^{もうけい}が期待^{まこと}して
ゐる。始^{はじ}めは口惜^{くち惜}しい心^{こころ}が、折角^{しょくかく}三年^{さん}続^{つづ}いてもう一年^{ねん}
残^{のこ}して是^{これ}が小石^{こいし}よ^うさうなるものと、当令^{とうり}間^ま勤強^{きんきょう}面白く^{おもしろ}て^てお^うまう^{まう}。

五月一日(月)快晴

今日より又書き初めた。どうしても書けなかつた。書きまた。氣は充分あつたのだが
幸新緑の五月より、意想を更新して思ひ切つて書き始めた。

今年の例年より一ヶ月気候が遅れてゐるやうだ。電車の窓から眺めて一度
今頃から若葉が漸く色づて来てやうだ。荀もまだ赤らし。人の詠玉
聞こえると二十位遅れてゐるやうだ。然し天下満春! 春風駘蕩
春日遲々として謡歌となつた。何と言つても春は衆い。凡中古万衆が
息吹く。春! 春! 実は三月節を。(いつも春眠不覺曉以
玉に傷む) 春ともなるば第一人気が暖い。練習生活。折柄只二九五
門どうに立ちぬるものだが、大自然、暖い抱擁に合つて皆、又活潑。又
まで口の中のかなしが暖くなつて、裏夙刺日々頃より、人気より見ゆ
全く気持ちいい。

学校も春着多模様。

橄欖の丘 春年下葉さらり下春日不^おかて

各個教練にいそむき。東部や〇〇部隊の兵隊さん達も幾合のんびりしてゐる

やうだ。然こ下さる一時間、空襲警報ならぬ。ヨリ角虫數試験警報發令。(もう少し報告あるが)

一、四、五は教科書より一二三は應用。二番張り切そやつたら、意外早く證明

出来た。残りの三番、二回火勢に委せて二点に分つてやつまつす。(解せん)

三回で全解。万々才、努力は神の星捨て給はず。感謝。

二点で三角形と三角函數はお陰で丁寧。全く三重の悦び。感謝。

何うあと三ヶ月たつた。二十九日! 審査復張了り。死んでもやるのを

食館までやる。男子に不可能なが、凡ての不可能を可能にしめる二点

真の男の意気甲斐あるのが、幸かる哉。

爲て事正得ん。幸かる哉。

昌兄の蘭を唇を噛み縛りて

頭張つてこそ、眞の勝利。後の吉野は大きくなる。大きくなると書きと進む。

人生六十歳まで生きること半生。これが人生三十。今こそ苦闘するが

苦闘。豆服を人間こそ眞の人間。苦いと嘗て人まへ又不幸であつたのは

苦いめ。懲め! それなりに喜びは更に更大きいが。

親友戸塚兄一、手紙

久しぶりで氣合がせぬ。よくもあればけりもの水書けをね。

僕は今更乍ら君・熱情に驚いた。何を知らねがすん^レ。3月蕙^ハうしてゆくやうな気がしてハツと氣がこゝる時一はもう三分の一位^{ウニ}三^ミまできてますてから。君・描寫力はもう押しても押さぬ。僕など足元^{シタハシ}も及ばない。

さて、題材を見つどか。眞是、ヒノ吉かけれど、今迄の君の作品は題材が全然なくてなかつたから。(失礼タク)よくも二んなやつを思つて思つて敬服^{スル}至りだよ。君が強^カてと言ふ方う思ひ印つて書くぞ。

まあやうして喜^ハれて喜^ハれて。次にて君にあつてづけに書くのはカッカ。

あそニリ多^シ川畔の情景が、描寫力はよいか。二人、会話がどうも腑^ハに落ちぬ。恵美子^ハのせ性^ハも少くとも二分以前に出でまし恵美子^ハは大きく畫がれてになつてかね。しまわりあんなせ性^ハに极^カめて一寸皮肉をあつ時^ハ恵美子^ハの氣持としては、あり時見立^ス一草一本、あらゆるもの^ハ激^ハい息吹^ハ。集中^ス焉^ハやうに思つては違ひ難^ハ。薪水^ハは余りに可愛^ハ。

高^シの惠美子^ハ少^シ大學校一年頃^ハ子供心^ハ、抜け印^ハな^シ。歌^ハり聲^ハと云ふ思はれ^カ。又君の人性^ハ兩^シ齊論^ハと云ふ所^ハ少^シつかもしかれ^カ。

君の^ハも肝臓^ハクライシク^ハ達^ハすと買^ハてしまふ。今度ばかりはそ^ハ様子が^ハつとも見える。異^シ状^ハ君^ハ努力^ハがよ^シ判^ハ。然^シ(又厚顎^ハ型^ハ多謝^ハ)

あ^シ社会^ハ会^ハ晚^ハより出^ハ聲^ハに至^ハる^シ。追^ハ日^ハあ^シリ單調^ハ型^ハやうだ。

油^ハ斧^ハ金^ハ前^ハ、刀^ハ刀^ハ等^ハ等^ハ。ヤソリ少^シかう。波^ハあつてもよ^シうだ。然^シ波^ハんてつけやうと思^ハ。いくつでもつけうれ^カ。

余^リ長^く力^ハかう。加減^ハにする。暫^シ休^ハんがう^シう。海^ハ生^ハ實驗^ハも控^ハえて相当無理^ハだ。僕は八月まで止^メる。モヨヒ^ハ書く氣^ハ力^ハがぬ。

何^シ言^ハてゆ一日^ハ勤^ハ強^ハだよ。

あまり老婆心^ハある事^ハが^ハ並^ハ々^シ氣^ハに障^ハり、良^い人に仕^ハける人間^ハ思^ハう。思^ハう。